



くとき、息をのむほどの美しさです。

アンテナというのは科学技術の産物なんですが、その出会いは仙人を見つけたような気にさせられることがあるんですね。物の見方を理系・文系と分けるとするならば、私自身は文系出身です。ですから、こういった視点になったのかもしれませんが、技術関係の方には、文系の人間が見たときにどう映るかの提示にもなっていると思います。

著者が語る「私の新刊」

『アンテナのある風景』  
著者/千葉朗氏に聞く



千葉朗著 大隅孝之 今井和則 月館佳則写真 / 定価7000円 / クリエイト・クルーズ / 〒107 東京都港区赤坂6-3-13赤坂二和ビル ☎03(3567)4454

僕は長年、電波関係の仕事をしてきました。ですからアンテナの存在はつきものですが、みなさんにとっては、普段あまり注目しない存在じゃないでしょうか。そうしたアンテナに目を向けてほしいと生まれたのが、この写真集です。カメラマンと一緒に、1年かけて全国70カ所を取材しました。100種を超える日本にある公益機関などのアンテナを自然の風景のなかで捉え、さまざまな表情を出しています。1万コマ以上のカットの中から、250点を収めています。

アンテナというのはどれも最高の技術を駆使し、少しの無駄もない合理的な形状をなしています。なおかつ、技術の世界にも、造形的にこんなに美しいものが創造されているのかと思うほど、芸術的です。たとえば、臼田宇宙空間観測所(文部省宇宙科学研究所の付属施設)にある日本最大のパラボラアンテナ(写真右)。精密な鏡面を支える裏面の鉄パイプも、美しい幾何学模様をつくり出しています。1000坪にもなるこのアンテナが、八ヶ岳の北に連なる人里離れた山奥で動いているのです。気象庁の富士山観測所にあるパラボラアンテナは富士山頂にたち、夕日を集めて輝

『ブーメランはなぜ戻ってくるのか』

著者/西山豊氏に聞く



西山豊著 / 定価1500円 / ネスコ発行 文藝春秋発売 / 〒102 東京都千代田区紀尾井町3-23文春ビル ☎03(3265)1211

“く”の字に曲がったもの、オーストラリアの原住民が使った狩猟用の道具、手元に戻ってくる武器……。みなさんがブーメランに対して抱いているイメージというと、こんなところでしょうか。ブーメランは、1970年代ころから、アメリカを中心にスポーツとしての側面をもつようになり、2年に一度世界大会も行われています。今回は神奈川県で開催され、日本でもブーメラン人口は増えています。

ところで、「ブーメランを確実に戻すための投げ方は」と聞かれたら、何と答えますか。水平に投げるものだと思う人が多いかもしれませんが、立てて投げるのが基本です。そうでないと、戻ってこないんです。それにしても、謎に満ちた道具だと思いませんか。投げたものが下に落ちずに、重力や引力に逆らうかのように飛びながら水平方向

に戻ってくるんですから。こんな道具は、自然界を見渡しても、ブーメランだけです。

僕自身の専門は情報処理ですが、身の回りの不思議なことを書き留めては一つずつ解決するのが好きなもので、10歳のとき駄菓子屋で手にしたブーメランもその対象になりました。もう10年以上も追いかけています。実際つくってみたブーメランは、数百本。戻ってきたブーメランを初めてキャッチできた記念すべき瞬間もビデオに収めて、大切に保存してあるんですよ。

本書は、いままでにわかった科学的根拠を地球ゴマなどで説明しながら、僕にとって愛すべきブーメランの世界を綴ったエッセイです。「ブーメランで人の首をはねることができるのか」といった仮想現実の考察も試みています。

生徒と一緒に死体を拾う楽しさ

●「クジラ、拾った」これは、本の中にも登場するミノルという生徒が五島列島で拾ってきたゴンドウクジラの頭蓋骨なんです。モグラの糞だのヤモリの死体だの、僕の机の周りは、こうしたもので溢れ返っています。ほとんどは生徒が拾ってきたものです。「動物の死体を持っていくと、あいつ、喜ぶ」って、彼らはもう知っていますから。父兄からいただいた冷凍庫には、ネズミやコウモリの死体がぎっしり。普通なら、強制撤去されるかもしれませんが、うちの学校は「いろんな価値観があっていいんだぞ」みたいな空気に包まれていて。授業の自主教材に利用するだけでなく、興味をもった生徒たちと一緒に解剖したり、骨格の標本をつくったりしています。

●「タヌキの解剖」ここら辺りではよく、交通事故死したタヌキにも出くわします。解剖して胃の中を見れば、彼らの食生活の断片がわかります。骨格の標本をつくるには虫に食べさせたり、いろいろ方法がありますが、僕は水炊きという手取り早い方法でやっています。何日もグツグツ煮て、肉が柔らかくなったら、骨を取り出すんです。

●「死体は僕らのよき先生」何かを見ようとしなければ、死体は気持ち悪いものとして終わるでしょう。でも、死体につく寄生虫からも何かが見える。骨はその生物の歴史を物語ってくれる。道端の死体は、その土地の「自然の案内役」でもあるわけです。生物を面白がるかどうかは、ひとつひとつ違っている生物の多様性を見比べるのが楽しいと感じるかどうか大きな要素だ



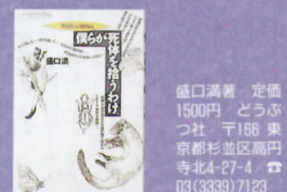
著者プロフィール / 1962年千葉県生まれ。千葉大学理学部卒業。自由の森学園・高等学校教諭。生物を教えるかわら、絵と文章の通信「飯能博物誌」を発行して、生徒たちに伝える。著書「里山の博物誌 虫の目、人の目、タヌキの目」ほか。

と思います。僕だって、最初から素手で死体に触れたわけじゃなくて、とりあえず棒で触って、スケッチすることで少しずつ慣れていったんですよ。

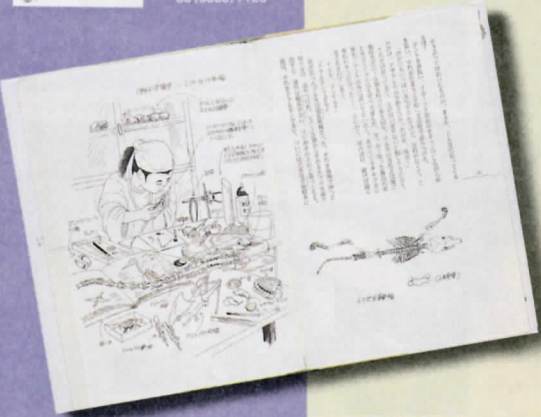
●「死体をめぐる交遊録」生徒たちは僕の想像していた以上に、面白がっています。たいていの場合は「こんなもの拾ってきて」と言われて、そこで途切れてしまいますよね。その点、ここは死体の収集センターのようになっているので、生徒たちも張り合いがあるんでしょう。もちろん、僕自身も。ひとりではなかなかできないことだし、皆でワイワイやって、いろんな面白がり方があっていいと思うんです。死体集めも、皆でやったほうが断然面白い! この本は、そうした生徒たちとの愉快なやりとりを記したものです。取材・文 / 和田美代子 撮影 / 津田文男



CLOSE-UP  
『僕らが死体を拾うわけ』  
著者/盛口満氏に聞く



盛口満著 定価1500円 とうぶつ社 〒116 東京都杉並区高円寺北4-27-4 ☎03(3339)7123



ニュー・ブックス・ダイジェスト

『光の国のグランプリ』

太陽の光をエネルギー源とする世界最大のソーラーカーレースが、3年ごとにオーストラリアで開催されている。大型ヘアドライヤー1台分のエネルギー源で、3000キロの砂漠を走り抜ける科学のレースだ。各国から52チームが参加した第3回大会(93年)の様相を伝えたルポルタージュ。

『誰にも聞けなかったこと』

「彼はいつもセックスの途中でコンドームをつけるけれど、大丈夫?」生理の予定日にちゃんと出血があったのに妊娠しているといわれたのはなぜ? ……意外と知らない女の性の常識46のウソを、クリニックで診察にあたっていた女医が解説。女性として知っておきたい項目ばかり。

『大江戸リサイクル事情』

江戸文化は、洗練の極致に達したリサイクル文化だったという。生活必需品の大部分は、太陽エネルギーで循環する植物を利用して作り出し、徹底して使い抜いた。水車、万能の素材だった竹、国を支えた稲藁、畑でできた着物の話など具体例をあげて、江戸のリサイクル事情を説明する。

『向井千秋 宇宙からの帰還』

日本中で「成功!」と話題になった向井千秋飛行士の宇宙飛行を、宇宙工学アナリストである著者が科学者として冷静に検証した本。メダカの実験を「無意味」と断じ、向井氏のNASAでの評判、ひいては日本の宇宙開発の基本姿勢といったものについても歯に衣着せず記している。

『笑うカイチュウ』

国内で急激に流行している寄生虫病の致々を、医者としての体験を交えて綴るメディカルエッセイ。「医者も知らない病気の正体」「有機栽培野菜によるカイチュウの復活」「14年間にへそから首に移動したオデキ」ほか。寄生虫とヒトとの共存をPRする著者の人柄も伝わってくる一冊。

『半導体産業の軌跡』

米国でトランジスタが発明されて以来、わずか50年足らずで巨大産業に発展した半導体産業。その歩みと特色を、半導体事業の現場に10年以上身を置いた著者が解説する。半導体の2大生産国である日米両国の強みと弱点については、文化的な違いまで掘り下げて触れている。

NEW BOOKS DIGEST

『博士になる方法教えます』

大学院を修了しなくても、博士号は取得できる! 著者の経験や知識をもとに、そのノウハウを集めた本。長い針を使う和裁術で医学博士に、スギナの研究で町役場職員がアメリカの博士になった例なども紹介。博士の世界の裏話も興味深い。創造的な研究の道を歩みたい人、必読。

ブルーバックス

『体の反射のふしぎ学』

「ヒトは考える動物である」。が、ヒトがヒトたる所以を知るうえで、ヒト以前に完成された生物としての基本的な神経機構である「反射」の存在に目を注ぐわけにはいかない。考えて結論をだす大脳皮質と、考えなくても正しく判断する反射神経。生命維持に不可欠なふたつの機能

BLUE BACKS

『体の反射のふしぎ学』

橋がどう関わり合っているのかを、ヒトがムカデ競走で転ぶ理由、匂いが過去を思い起こさせるわけなど、身近な例で解説していく。反射は、膨大なエネルギーを消費する大脳皮質の活動をできるだけ簡略化するための、省エネ対策……ということが理解できるだろう。

『危険は予測できるか!』

私たちは、無数の化学物質に囲まれて暮らしている。なかには、松本で起きた有毒ガス事件のように非常に危険な物質もある。そもそも、化学物質とはどんなもので、どのように毒性を明らかにするのか。「ここまでは、安全」という線引きの科学的根拠は何か。これらの疑問に答えた書。

『新交通システムをつくる』

新交通システム(機関)とはどういうもので、なぜ必要なのかをリアモーターカーなどの開発に携わってきた著者が綴った書。まず新交通機関として最もオーソドックスなモノレールについて触れ、無人駅に無人運転の列車が走る構想の話へと展開していく。珍しい写真や図版も豊富。

パズルの答え

問題289 "There are only peahen eggs."  
問題290 「じゃあ、キミは悪い人だ!」つまり、最初から途中で「知ってる?」とたずねるのが予定されていた問題だった。そこで「知らない」と答えたら、それは手紙を受け取っていないから知らないのだから、結局、悪人と決めつけられてしまうのである。でもボクは思う。「知ってる」と答えた人は頭がいいが、知らなかったものを知っていると答えたのだから、ウツク……こっちこそ悪人なのだ。